

地方移住で 「ほどよいライフ」

3.11前年
2010年と2016年比較!
移住希望地ランキング

2010年		2016年	
1位	福島県	1位	山梨県
2位	長野県	2位	長野県
3位	千葉県	3位	静岡県
4位	岩手県	4位	広島県
5位	山形県	5位	福岡県
6位	茨城県	6位	岡山県
7位	宮城県	7位	大分県
8位	山梨県	8位	新潟県
9位	静岡県	9位	長崎県
10位	宮崎県	10位	宮崎県

＝西日本
※NPO「ふるさと回帰支援センター」移住相談者アンケートより作成
◆東日本大震災後、西日本を希望する相談者が圧倒的に増えた

と低くなりました」
そして東日本大震災と福島原発事故があった11年からは、子育て世代や若者たちの視線がいつせいに西日本に向く。NPOなどへの就職も人気になったし、第一次産業を応援しようという機運も盛り上がった。普段は都会に住んでいても、いつでも遊びに行ける田舎を持つ2拠点生活「デュアルライフ」が人気となった。年に何度も都市と田舎を往復するスタイルを、解剖学者の養老孟司氏は「平成の参勤交代」と呼ぶ。

かつて東京や大阪から故郷に戻るのには「負け組」といわれ、肩身の狭いものだった。ところが、今ではその意識も大きく変わった。14年には、民間シンクタンク「日本創成会議」座長の増田寛也氏が「2040年に消滅する自治体」を名指して公表し、自治体も移住受け入れに本気になった。いま、移住者はむしろ地域の希望の星なのだ。

都会から高校生が島根県へ留学!
「島根県では明らかに風向きが変わりました。県内の小中高の教育を魅力化して留学生を招き入れよう。定住してもらおうという動きが本格的になってきた。この動きの中心になってくれているのは、移住してきた若者たちです」

そう語るのには島根県教育庁社会教育課の江角学氏だ。島根県は人口70万人を割り、東京の練馬区より少なくなつた。「どこにあるか最も知られていない県」といわれることもある。ところが人口2300人余りの隠岐島の海上町で約10年前に始まった「高校魅力化」に向けて店を継ぐ人を募集するチラシを作成している。また、岡山県美作町ではよその家の草刈り(1日9000円)、カフェ店員、高齢者の生活支援、NPO職員など、複数の仕事をこなす複業で立派に自活している移住者もいる。

かつて移住というと職探しが最初の難関だったが、工夫と努力次第で、ずいぶん状況は変わってきたのだ。

移住ブームで自治体もアピール合戦
移住の歴史を振り返ってみよう。60、70年代は定年後の移住が大半だった。田舎を目指す若者には、学生運動からのドロップアウト組が目立ち、地元になじむ意識は薄かった。

80年代はバブル期で、田舎でもリゾートブームや不動産ブームが到来。87年創刊の『田舎暮らしの本』(宝島社)でも、田舎の物件情報を紹介していた。90年代に入るとポストバブル。物欲の反動で精神的豊かさが求められるようになる。『定年帰農』という

の取り組みが成功し、同町の隠岐島前高校には毎年定員いっぱい25人が全国から『島留学』してくる。島で3年間生活する高校生たちは「島親」と呼ばれる地元民にお世話になり、たくましく成長する。島根県では15年から全県でこの取り組みに乗り出し、16年には県内に約200人の「しまね留学」生を招き入れた。

これまで地域活性化は、産業振興の文脈でしか語られなかった。それでは環境破壊や地域の文化風習の喪失にもつながる。地方を荒んだミニ都市化するだけだ。ところが教育という切り口ならば、地域の文化を伝えられ、故郷を愛する子どもを育てることができる。それができるのはよそ者の視点を持ち、地域の魅力を伝えられる移住者たちだ。移住者が新たな移住者を招き、故郷を愛する子どもをも育てる。まさに理想的な好循環が生まれつつある。

日本はいま急激な下り坂を下っている。総人口は06年をピークに次の100年で3分の1の4000万人になるといわれる。東京も2020年以降、人口減少に転じる予測だ。

上り坂(人口増、経済成長)

長)の時代には、政策として若者は都会に集められた。地方から東京を目指して集団就職列車が何本も走り、職業安定所は全国ネットワーク化された。上り列車の先に未来があったのだ。それが反転した下り坂の時代に、人はどこに未来を見ようとするだろうか。

高収入のかわりに過剰労働や時間に追われる都会の生活を自ら捨て、地方で豊かな生活を送るダウンシフターズ(＝減速する人)という生き方も生まれてきた。しかし、地方で生きるためには生業が必要だ。その地にはない仕事を創らなければならぬ。その土地で役に立つこと、地域の課題を解決すること、その先に仕事がある。そして「ありがたい」と感謝されることで生きがいが生まれる。多様な価値観を持った人たちは地方に活路を見いだす。

安心安全な環境で子育てがしたい。通勤に時間を使うよりも、趣味の時間や家族との時間を大切にしたい。そんな「ほどよい生活」を求めて――。下り列車に乗って未来を見つけようとするのが、新しい時代の潮流だ。移住新時代。その詳細を探っていく。

シニアも若者も、 今なぜ、都会から田舎へ?

のリアル

いま「地方移住」に熱い視線が注がれている。隠居生活が目的の田舎暮らしではない。若者もシニアも、好きな仕事にのびのび精を出し、自給自足に近い生活のなかで、自分らしさを満喫するために、地方を選ぶ。「買うより作る」「金より自由」「モノより時間」と彼らは言う。過剰な便利さにどっぷり浸るうち、いつしか見失っていたナチュラルな価値――そこに気づいた移住者たちの「ほどよいライフ」を取材した。

複業(マルチワーク)、継業、デュアルライフ、ダウンシフターズ、嫁移住、孫ターン――。
何の意味もおわかりだろうか。すべて「地方移住」にまつわる新しい潮流を表す言葉たちだ。

つまり、それだけ現在の移住が多様な価値観や生き方、働き方を生みだしているということ。

移住相談窓口を開設し、年に400回もの移住相談会を実施している東京・有楽町にある「ふるさと回帰支援センター」の利用者もここ数年で大きく増加。

2010年には2000人程度だった来訪者数は、14年に1万人、昨年16年に2万人を超えている。

同センターの副事務局長・高和雄氏は、現在の状況をこう語る。

「明らかに20代から40代の若者層が移住を希望し、実現しています。かつては定年後の悠々自適な田舎暮らしが主流だったけれど、いまの移住希望者は田舎で働くこと、ITの発達でオフィスには出社しないノマド(遊牧民)ワークも可能だし、もともと田



自治体が移住者向けに「継業」のチラシを作成

舎にあった商売(店舗、職人技など)を継ぐ「継業」も始まった。いくつかの職業を掛け持ちして生活費を稼ぐ複業スタイルも当たり前になりました。移住者を歓迎する自治体も圧倒的に増え、震災後は西日本への移住希望者が増えた。その流れはこれからも当分変わらないと思います。

高氏は、さまざまな移住の事例を語ってくれた。沖縄県の国頭村では地域唯一の商店が店をたたむことになった。高和雄氏は、移住者夫婦が店を引き継ぐことになった。秋田県由利本荘市では老夫婦が長く営んだパン屋さんをたたむことに、自治体主導で移住者

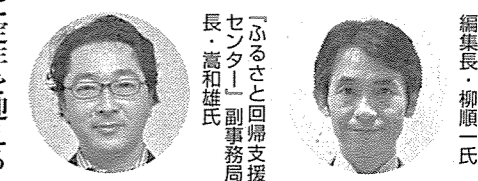
金はほどほどに。地方で叶える「自分らしさ」

ノンフィクション作家 神山典士

言葉がブー
ムとなり、
多様な価値
観やライフ
スタイルを
提案する
『ソトコ
ト』(木楽
社)が発刊
された。
2000
年代に入る
と、団塊の
世代が一旦に定年を迎える
2007年問題が浮上。受け皿としての移住に光が当たった。自治体が空き家バンクを設け、移住担当窓口を置くようになったのは、このころのこと。

『田舎暮らしの本』の編集長・柳順一氏は、こう振り返る。

「1度、本誌の編集部を離れて08年に戻ってきたときの驚きは忘れられません。全国の自治体があんなに!と思うほどに移住受け入れに積極的になっていった。以前は役所に移住相談窓口なんてなかったし、物件を買わないと移住は難しかったです。ところが空き家を貸してくれるシステムや、移住支援制度が次々とできた。このあたりから移住のハードルはグッ



田舎暮らしの本 編集長 柳順一氏

【地方移住】最新情報は支援団体HPでチェックしよう!
●NPO「ふるさと回帰支援センター」 <http://www.furusatokaiki.net/> ●「ニッポン移住・交流ナビ(JOIN)」 <https://www.ju-join.jp/>
※先着移住者トークイベント予定や、お仕事・空き家情報、自治体支援制度などを配信中!

千葉県匝瑳市に広がる 移住者コミュニティを訪ねて



(中央下)移住希望者からの相談が殺到するバーのマスター・高坂勝さんなど、田植えをする[SOSA Project]のメンバー (撮影=倉田 爽)

都内から電車や車を利用して最短90分。北部には里山、南部には九十九里の海岸がある自然豊かな千葉県匝瑳市。ここにはいま移住者コミュニティが広がっている。暮らしの自給力を高めたい——そんな思いを抱えて移住した女性と、家族を追った。

東京・油袋の片隅に、移住への「秘密の入り口」がある。駅から複雑な繁華街を通り抜け、徒歩約10分。住宅街との間にあるバー『たまにはTSUKIでも眺めましょ』。

扉を開けると、狭い空間は熱気ムンムン、真剣な会話が展開されている。「会社の仕事はウソが多すぎて心が折れそうです」、「移住のための家を探すにはどうしたらいいのでしょうか?」、「みなさんどうやって会社を辞めるんですか?」など。

移住相談が舞い込む不思議なバー

住した人とも話せるよ」高坂さんは約16年前に会社を辞め、匝瑳で休耕田を開墾して米づくりを始めました。当初は週に2日、いまは週3日間を匝瑳で過ごし、残り4日間はバーを開ける。デュアルライフ、半農半飲み屋生活だ。

匝瑳では都市生活者の移住や農的生活を支援するNPO「SOSA Project」を展開。休耕田をまとめて借りて希望者に転貸。米づくりを教え空き家情報も移住希望者に知らせている。その生き方を綴った『減速して自由に生きる』(タウシンプラズ)『ちくま文庫』は都市生活に疑問を持つ人に読み継がれ、バーには多くの相談者がやって来る。

レンタル田んぼで自給の幸せを共有

「でもひとりぼっちになつて寂しいときもあるよ。そういうときは思いっきり泣くの。泣くとすっきりする。まっぴいかって思えるから」はじけるような笑顔だ。8LDKの古民家は家賃1万5000円。今年は3畝借りた田んぼから約100キロの米がとれる予定。畑も始めて野菜も少しとれる。月の生活費は約15万円。障害者年金とワークシヨップの開催(宿泊食事つき)、カウンセリングなど



田植え真っ最中のまりりん (撮影=倉田 爽)

「化粧はしなくなっちゃったけど化粧水は自分でつくるの。ビワの葉、ヨモギ、ドクダミ、ユズの種なんかを拾ってきて、「こっちに来てからめっちゃ元気になった。風邪なんかひかないし、お医者さんに通うのは歯医者だけ。食べ物も自分でつくると、農家さんもくれる。本当に美味しいよ!」

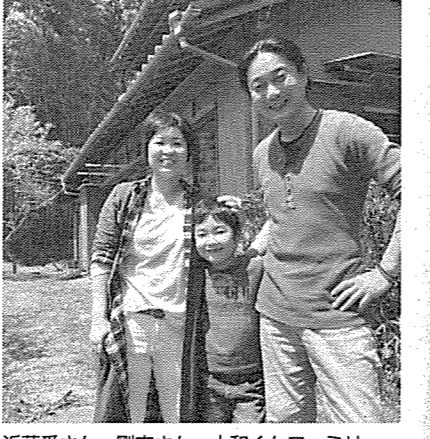
「地域のお母さんたちいろいろ助けてもらっています。子どももこのまま可愛がつくれるんです。息子が入った小学校では校長先生が冗談まじりに、「大和くんの入学で廃校の危機を逃れた」と喜んでくれました。移住がうまくいっているのは、8割は子どものおかげです」

「お子安講」に参加する。2人は自分たちに合った仕事を探し続けた。移住仲間も情報をくれた。知り合いの社長が助けてくれたこともある。都会でも同じだが、理想の仕事にはなかなか出会えるものではない。そんなとき、移住仲間が『市民エネルギーちば』を起業し、畑でソーラー発電を始めると聞き誘われた。「ここで働かない選択はないと思います。食べ物とエネルギーを自給できる。ぼくらの理想の原点です」

その現場では35000平方メートル(約3.5町歩)の休耕田一面に、約3メートルの高さでソーラーパネルが張られている。下の畑では小麦が無農薬栽培され、いづれ野菜もつくられる。近藤夫妻はここで働くことに決めた。自分たちの理想の生活へ。一步一步の歩みが続く。

取材・文 神山典士 こうやま・のりお 1960年、埼玉生まれ。徳州大学卒業、ノンフィクション作家。97年「不敗の格闘王前田光世伝」で小学館ノンフィクション賞優秀賞、2014年「佐村河内事件報道」で大宅社ノンフィクション賞(雑誌部門)、「ピアノはともだち 奇跡のピアニスト辻井伸行の秘密」が全国読書感想文コンクール課題図書に。近著に「下山の時代を生きる」(平凡社新書、共著)

「何がうれしくて、自分が心から楽しい♡って思っていることを、たくさんの人と一緒にできること。(中略)今年もお米づくりに夢中になります」



近藤愛さん、剛志さん、大和くんファミリー。自宅前にて

「お金より、生きる技術を息子に残す」

その田んぼで、今年3度目の米づくり作業を始めたのは、昨年千葉県市川市から移住してきた近藤愛さん(32歳)、剛志さん(44歳)、大和くん(7歳)一家だ。愛さんはこう語る。

「お金はあっても、意味がない。いままでも何を信じていたんだ」。そう思っていたときに高坂さんと出会い、匝瑳で田んぼを借りて米づくりを始めました。その作業を通して「この子に残してあげられるのはお金ではなく生きる技術、食べ物を生み出す知恵だ」と実感。最初の刈り入れが終わるころに移住を決意。古民家も見つかって、大和くんの入学に合わせて16年3月、住んでいたマンションを売却引越して引越した。

「都内での生活費は30万、40万円。こちらでの生活は20万ですむんですが、そのお金をどう稼ぐか。今年からピアノ教室も始めます。生徒も入ってくれて、現在、絶賛大募集中です。将来は音楽で生計を立てたいと思います。いまはそれだけで安定しない。やはり生業が必要なんです」

移住してからの1年間、2人は自分たちに合った仕事を探し続けた。移住仲間も情報をくれた。知り合いの社長が助けてくれたこともある。都会でも同じだが、理想の仕事にはなかなか出会えるものではない。そんなとき、移住仲間が『市民エネルギーちば』を起業し、畑でソーラー発電を始めると聞き誘われた。「ここで働かない選択はないと思います。食べ物とエネルギーを自給できる。ぼくらの理想の原点です」